

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	日向 伸介
論文題目	近代タイにおける王国像の創出 —ダムロン親王によるバンコク国立博物館の再編過程に着目して—		
(論文内容の要旨)			
<p>タイの近代国家は、現王朝の5世王治世 (1868-1910年) に、中央集権化と国王への権力集中を進めることで、形成された。新しい国家領域とタイ史上前例のない絶対君主制に正統性をまとわせるために尽力したのがダムロン親王であった。親王は5世王の異母弟であり、1880年代には教育の近代化を担い、92年からの23年間は内務大臣として中央集権的な統治体制の整備にあたった。1915年に内相を退くと、学術・文化活動に精を出した。本論文は、ダムロン親王が、絶対君主制を正統化する国家観や歴史観を、博物館を通じて可視化していった過程を実証的に解明している。本論文は、考古学行政の整備、美術史の著述、バンコク博物館の改革に着目し、ダムロン親王が自らの政治観を表現しようとする過程を文化政策史という観点から明らかにしている。</p> <p>本論文は、まず第2章で、バンコク博物館の前史を略述する。続く第3章から第5章が主要部分となる。第3章では、タイにおける考古学行政の嚆矢とされる「古物調査・保存に関する布告」 (1924年)の経緯や意味を考察する。タイは第一次世界大戦に終戦間際の1917年に連合国側に立ち参戦した。ワチラヤーン図書館の館長を1905年の創設時から務めていたドイツ人が解雇され、代わってフランス人のジョルジュ・セデスが1917年12月に着任した。セデスはフランス極東学院の考古学者であり、タイの考古学の発展に寄与することになる。その後フランスは1922年には大使が、23年には政府が、考古学を重視するようにタイ政府に要望した。不平等条約の改正に関心を抱くタイ政府は、文明国らしく考古学行政を担う能力があることを示すために、24年に上記の布告を出した。布告を起草したのはダムロン親王であった。</p> <p>第4章では、ダムロン親王の著作『シャム仏蹟史』 (1926年刊行) について分析する。同書は、最初のタイ美術史であることが知られている。同書での仏蹟は、仏舍利、聖遺物、経、奉納品の4つを指す。同書は前半部分でインドにおける仏蹟の誕生から各国への伝播、後半部分でタイの仏蹟について述べている。同書は、ヨーロッパやインドで19世紀以後に進展した仏教研究に立脚しており、タイの仏教・仏蹟を世界史的な枠組みの中に位置づけている。親王は、仏法による統治を試みたアショーカ王について、主人が下僕を支配するような独裁的な統治を、父が子を庇護するような温</p>			

情的な統治へと改めたと高く評価した上で、バラモン教に基づくクメール式の統治を否定し仏教に基づくタイの統治を正統化する論へとつなげていった。親王は、1924年末にフランス領インドシナのアンコール遺跡やアルベール・サロー博物館を訪問したことをきっかけとして、東洋学の成果を取り入れることにより、仏蹟という具体的なものに依拠して、絶対君主制国家を再定義し支えようとしたと分析している。

第5章では、旧副王宮博物館を改変して1926年に新装開館したバンコク博物館（後のタイ国立博物館）について考察する。親王は、それまで大半を占めていた動物の剥製に代えて考古遺物を展示品の中心とした。考古遺物の多くは、内務省、地方博物館、ダムロン親王の私邸などからの移管品であった。それらは全国各地から集められたものであった。展示に当たっては、タイ国内に多数存在するクメールの考古遺物との対比において、タイ民族のすぐれた点を際立たせる配置が行われた。親王は、さらに、学校に博物館見学を促すことで、国王への忠誠心とタイ人としての民族意識に基づく愛国心を教育しようと試みた。

本論文の主張を要約すると、ダムロン親王はフランス領インドシナにおける文化行政の直接的な影響を受けつつ、偉大な国王のもとにあるタイ民族を中心とした王朝国家という王国像をバンコク博物館において可視化し、学校教育を通じて臣民に伝えようとしていた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、タイにおいて、1880年代から1932年までの半世紀にわたって政治、行政、教育、思想、学術など多方面にわたって顕著な実績をあげたダムロン親王を対象として、バンコク博物館の改変過程における親王の役割に焦点を絞り、親王流の王国像が創出される過程を解明しようと試みている。親王はタイ歴史学の父と称えられ、その国王中心史観が学校教育における正統な歴史とされている。親王が描いた王国像は、タイの君主制が1932年立憲革命を乗り越えて復権を果たして今日に至ることを可能にする文化的思想的礎のひとつとなっている。この意味で、本論文は、現代的な意義が大きい歴史研究である。

本論文は次の点において東南アジア地域研究への学術的貢献を高く評価しうる。第1に、先行研究が見過ごしてきた文化政策の重要性に着目している。ダムロン親王は、教育の近代化、地方統治制度の整備、国史研究で非常に大きな足跡を残しており、それらに関する先行研究は多い。しかしながら、文化政策に脚光を当てる研究はほとんどない。この点で本論文は独創的である。

第2は、構想力の大きさである。本論文は、バンコク博物館の改変を、絶対君主制に文化面から裏打ちを行う作業の集大成という斬新な視角からとらえている。先行研究では、バンコク博物館は、7世王治世(1925-1935年)になってから改変が加えられたことが指摘されてきた。しかし、どのような品々がどのように展示されるようになったのか、変化はどのような政治的文脈で生じたのかといった基本的な点については実証研究が疎かにされてきた。本論文は博物館の整備過程について、一方では文化財収集における政治・経済権力や外交関係、展示の枠組みを左右する美術史の政治性を丹念に跡づけ、他方では親王が作った中央集権国家、それを正統化するために構想した歴史観、その歴史観を定着させるために改変を加えた博物館という立体的な構造の中に定位させることで、明解に分析している。

第3は、先行研究が美術史ととらえてきた『シャム仏蹟史』をダムロン親王の政治的意図と関連させて読み直し、新たな解釈を提示したことである。本論文は、同書が東洋学の発展に大いに負っていることを明らかにし、タイの仏教を壮大な仏教文明史上に位置づけていると指摘する。その上で、同書がアショーカ王の治績を賞賛するのは、そこにタイの国王の姿を重ねることで、タイの伝統的な統治形態である君主制こそが古代から仏教文明の担い手であったことを歴史的な観点から主張しようとする試

みであったと論じる。

第4に、本論文は、これまで利用されてこなかった歴史資料を用いている。考古学行政については、公文書館の一次資料を活用している。『シャム仏蹟史』については、ダムロン親王の蔵書目録の一部を利用して、親王が考察や記述にどのような文献資料を用いたのかという点について考察している。博物館については、改変当時のガイドブックを発見し、分析に活用している。このように、本論文は先行研究が見落としてきた多数の新史料を用いた史料的価値の高い研究である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。